

女方として生きる

篠井英介

篠井英介氏 略歴

俳優、石川県金沢市出身。五歳より日本舞踊を始め、藤間流名取。日本大学芸術学部卒業。在学中より加納幸和事務所（一九八七年より改め花組芝居）に所属し、女方（おんながた）のスターとして活躍。一九九〇年花組芝居退団後も「女形能進晨鐘 ハナノアケガタ」（一九九〇年）の澤村田之助、「毛皮のマリー」（一九九一年）の毛皮のマリー役などで、現代演劇の女方として独自の境地を切り開きつつ、テレビ、映画にも出演多数。

一九九二年にゴールデン・アロー賞演劇新人賞を受賞。最近の主な演劇主演作品には二〇〇七年「欲望という名の電車」、二〇〇八年「サド侯爵夫人」、二〇〇九年「サロメ」などがある。

1 女方として生きる

篠井でございます。「しのい」という字を書きますんですが、でも読み方は「ささい」なんです。これは富山の方に小さな城端町というのが山の方にありまして、そこが本家なので、あとあれですね、丹波篠山、お豆の有名、黒豆とか有名でしたっけ。京都の方ですね。何県かしらあれ。兵庫県だそうです。の、丹波篠山の「篠」は、この「篠」

を使うんじゃないかな。ですから関西の方に行つて、これで「ささい」と読むんですよ、と言うと、ふむふむと、納得していただけるんですが、関東でこれを「ささ」と言います、と言つても「ええー？」という風に。あと「しのいさん、ファンなんです！」っていう。絶対に貴方はファンではない、ね。まあ踏み絵のような名前。とても便利でこ

ございます。で、だから「ささいさん」と声をかけてくださる方がいると、おっすごい！と逆に、何か点数上がりやすくて感じ。貴方はちゃんとわかってますね！っていう。いろいろ名前というのはおもしろいもので、私は本名で出てしまっておりまして、あまり悪いこともできない！という生活を、ましてこんな名前ですから。

今日ご縁があつてこちらへ伺つて、のどかなこの山の山まで上がつてまいりまして（笑）、大変、大変というか皆さんはすごい。

で、全然お喋りのプロでもないのに、大したお話もできないんです。先に謝っちゃいますね、すみません。で、あの、確かに演劇が大好きなものですから、それを生業にしている。そういう人をテレビや舞台でご覧になることはあつても、生でこう素顔というか、まあ最近バラエティもありますけどね。でもバラエティもあれはやっぱりみんな演じていると思いますので、まあこういう人とこう少しいろいろ話聞いたり質問してみたりというのが些かなりとも皆さんの気晴らしに、お慰みになればという程度のことです、お邪魔しておりますので、あまりふかーい期待をしないでお願いいただければな、と思っております。

や、実はこんなことを言っているのはね、ちょっと沈むというかね、ちょっと鬱気味だったりするんですね、今日

ね。でね、これは何故かと言いますと、今年僕五一になるんですけどね、あまりに真面目なので。自分で言うなよって感じなんですけど。あまりに真面目なので、自分の仕事、俳優の仕事ですね。と、自分自身の人生みたいなものを振り返つてしまう惑いの年代なんです。今日ご紹介いただいた杉山先生とは古い知り合いで、二十年以上前から僕の舞台を観に来ていただいているんですね。で、もう月日経つの早いんですねえ、なんてさつきお話して、二十年かあ、何やつてたんだろつてこう思っちゃったりする年代なんです。で、今日も夜はこれからこの近所の生田スタジオというところでテレビのお仕事もあつたりするんですけど、仕事行くんですよちゃんと真面目に。で、ちゃんと仕事してくるんですけど、こんなことしてもいいんだっけなあ〜なんか役に立ってんだろかなあ〜つてこう思つてしまつたりする。僕それでもう一つ大きいのは家族がいらないですね。独身なんです。これも多分、かなり影響していると思います。なんか、割とはしゃいで、はしゃぐつていうのはアレですけど、はしゃがざるを得ないバラエティ番組とかあるわけですね。で、僕なんか全然、見るとはしゃいではないんです。でも周りの人がはしゃいでいるので、はしゃぎ伝染みたいのがして、ただただ疲れたつていう。ほとんど喋つてないんだけど疲れたつていう時

があつたりして。それで我が家に帰ってきて、さて洗濯物取り入れてーとかって(笑)思つてたりして、その何て言うんでしよう、まあ華やかとは思いませんけど、派手ですよねテレビのああいふ世界は。それと生活とのギャップみたいなものに、根が地味なんでしょうねきつと、なのでちよつといろいろ考える。でも頭の中にあるもう一つの回路としては、大きく言えば俳優もアーティスト、芸術家なので、ある種アーティストックにクリエイティブなことも別の回路としては大きく夢としてはあるんですね。こんなことをしよう、こんなものを作りたい、こういうものを世に聞うんだ、みたいなことはあつて。それと別に、なんかすごく下世話でいて、まあこれも大事なんですが実生活みたいなものもあつて。で、目の前にはやりたいお仕事もあればやりたくないお仕事もそれもあるいろいろな事情から、やらなければいけないかつたり、いろいろあるわけですね。ですから今日僕に、何か芸能界的な、芸能人的なものを期待していらつしゃつたとしたらすつこい間違いで(笑)。今日も早めに向ヶ丘遊園の駅に着いちゃつたので、あの、乗りもしないバス停のところにこうやって、鞆を抱えて座つていたら、ここへいらつしゃつてゐる知り合いに見つかつてしまい、「あ、すつこい具合悪いように見えたかもしれない」つて思つたんですが。でもあんなもんですよ人間

ね、別に時間あまつたんだからバス停でこうやって座つて待つてただけのことなんですけど、ですから全然芸能人ばかりではないので、残念ながら。ですからあんまりそれに關しては、あの、多少のエピソードくらいは言えますよ。沢尻エリカはやつぱり嫌な感じだったか、とか(笑)そういうことは正直、言えると言えれば何でも言えますけど、別に沢尻さんと仲良しでもないし、あの今果たしてあんまり聞かなくなつちやつたしね!どうしてるんでしようね。不思議。明日は我が身つて、こういう時、思うわけですよ(笑)「あらつ、こないだ大学の講演会でお話聞いた篠井さん全然見かけなくなつちやいました」なんてね。やはり世の中つてテレビつて大きいんですね。テレビに出ないともう話にならない。出てるんです、割と私。これでも。俳優以外のお仕事もなぜか呼んでいただくことが多いので、NHKさんなんか、別にNHKに特別受信料倍払つたりしてゐるわけでもないんですよ。よく使つていただき、お昼のいろんな旅番組のレポートとか、あとブックレビューでご本を紹介するとか、ちよつと文化的な感じで、俳優として役を演じる以外のお仕事もたくさんしてゐるので、割と出てるんだけど。知人から「このところ全然見ませんね!」つてメールなんか来ると、ええ、もう終つたのかな僕: つて思つたりするわけですよ。そのへんがね、難しいとこ

るなんですけれど。

で、えーと題が「女方として」なんですけれど。そのうち疲れたら質問コーナーに切り替えますから。もうちょっと元気があるうちに喋るときますね。女形っていうのは、今日さつき先生とも喋ってたんですけど、あの「カタチ」がお人形の形ですね。形って書く方が今一般的なんですって。ですから新聞社さんとかで取材を受けて「女方です」って言うのと、あっちの、お人形の形になっちゃうんですけど、まあ女の形をなぞるのではなく、精神論も含めて、「女の方へ行く」って意味では、こっちの方が格好いいなと思って、まあ使わせていただけの時。かと言って、今女方というのが存在しているのは、「女形」という言い方をするのは歌舞伎ですね。あれは全部男ですから。あと女形という呼び方をするのは、新派。新派に今お一人だけ。劇団新派ってあるんですよ。お若い方知らないでしょうけど。えーどう説明していいんだか。簡単に言うと旧派が歌舞伎。歌舞伎は昔からの、三〇〇年くらいの演劇。日本の。で、それに対して、もうああいうのは古いよ！って言って起こしたので、新派なんですね。新しい派。えーそれはまだ存在していて。その新派も今ではもう既に古典の域なんです。でもいいですよ！僕新派大好きなんです。で、そこにお一人英太郎さんっていう女形さんが現在いらっしや

る。で、その昔は喜多村緑郎…喜多村緑郎さんとか花柳章太郎さんとか、名女形さんがいらした。日本の古典芸能を言うとかとあるのは文楽。お人形のお芝居。これはどっちかって言うとお大阪が発祥の地なので、上方のもですね。なので、関東圏は、ちょっと馴染みがないんですが、でも今すっごい文楽人気なので、国立小劇場で年に二回か三回公演すると、すぐ売り切れちゃう。文楽。人形浄瑠璃。と、能狂言がありますね。あれも、全部男しかいません。でも、能で何とかがって女の役…例えばあれか。羽衣の天女、は女性の役ですけど、男性が演じますが、あれを「女形」という呼び方は何故かしませんね。でも全部男でやるのが当たり前。で、文楽、さつき申し上げた人形浄瑠璃も、使い手さん、お人形を操る人も、横で顔真っ赤にして、血管切れるからやめなさい！って言いたくなるおじさんが義太夫を唸っているのも、男の人。ですから、日本の古典芸能って考えてみたら全員男なんです。まあ最近はそのんこと言ったら途絶えてしまうぞ、ということになり。お相撲も一緒ですよ。お相撲も何か土俵に上げちゃいけないとかちよつと揉めたことありましたよね。今どうなってます、あれ？上がっちゃっていいの？今お能は、実はお囃子方、お鼓とかお太鼓とかは、女性が交じることもあります。それから、女の人でありながらシテを舞う、主役を舞うって

ことももちろんありますが、あるようになってしまったのね。でも本来としては全員男のものなんですわ。ということとは、日本の伝統芸能は、今日の会場は女性が大半なのにもすごく申し訳ないんですが、男のものなんですわ。男がやるように作ってきてしまったものなんですわ。で、女優さんっていうのが生まれて本当にまだ、大したことないんですよ。日本では一〇〇年経ったか経たないかなんですよ。それで、何か聞いたことある人はいるかもしれませんが、松井須磨子さんとか、えー貞奴が先かな。なんか芸者さんが踊りを踊って。で、映画も大体一〇〇年くらいですかね。映画発祥。日本に入ってきて。で、映画も最初は女優ってものがいない時に日本に入ってきてきちゃったんで、最初の、無声映画ですよ。声出さないからできたんだけど、全部女形さんがやってたんです。で後年、映画監督になる衣笠貞之助さんって方がいるんですけど、その人はもともと歌舞伎の女形さんだった。で、女形として自分も女優のように映画に出てらした。で、おやめになって今度は監督になっちゃったっていう人なのね。でも今や長谷川一夫も大川橋蔵もみんな知らない時代になっているんですが、彼らももともとは歌舞伎の女形さん。橋蔵覚えてます？えー良かったですよねえ。銭形平次です。橋蔵は、本当になんかただのミーハーになりますけど、歌舞伎座で毎年「大川橋蔵公

演」っていうのやっていたんですよ。それで一本目は銭形平次をやる。お芝居で。で、中幕に必ず『娘道成寺』踊ったり『鏡獅子』踊ったりしていたんですよ。なぜなら六代目菊五郎っていう大名優の一応血筋ではないんですけど薫陶なんですよ。で、六代目の薫陶を受けてるって想いがあって、もともと映画にお出になる前は女形さんだったの、必ず中幕に踊りを踊るんですよ。そうすると僕らたまにちよつといい席で、二階席とかでちよつとお金張り込んで観に行くのと隣に来てる人が「あれ踊ってるの誰？」とか言って「いや橋蔵じゃん！」って思うんですけど、その、銭形平次しか見覚えがないので、あそこでかわいいお振袖着て踊ってるのが大川橋蔵だとは誰も思わなかったっていうようなエピソードもあるくらいに、両方できちゃった、昔のスターさんって。女役も男役も。で、私は、歌舞伎が大好きなので、歌舞伎に：そうねえ五十年くらい前だったら誰かの弟子になつていたかもしれないです。あの、生まれてくるのが今よりも五十年前ね。僕は昭和三三年くらいですけど。もつとその前だったら、歌舞伎に弟子入りしたかもね。でも、私が物心つき、まあ踊りは六つの時から日本舞踊はやってたんですけど、それも好きでね。何故かね。もうしょうがないですねこれ、ね。何か持つて生まれた、あるのね、それ。で、その歌舞伎はもう僕が物心ついた時

点では、ちよつともう時既に遅しで。ほんとにこう、ちゃんとした役をもらえぬ幹部の俳優さんのところに弟子入りして、養子になつて。ただ弟子入りしただけじゃ駄目なんです。養子にならなきゃ駄目です。で、ちゃんと役をいただけるようなところになるのには、やはり大変なんですね。たまたまそういうお家に生まれちゃつたつていう人は、幹部になれるんですけど、もう一般人はほとんど。最近ですからね、あの猿之助さん一座の彼らがね、ああやつて一座組んで自分達が主役をやつたりできるつていうのはね。世襲の世界なので、難しいわけですよ。でも女の役の方がやりたいのになあ〜とこう思い続けていて、大学に入つたら、いやー世の中広いので、そんな同じこと思つてた人がいたんですよ。自分だけかと思つたらいたんですよ。それがまあ花組芝居の加納幸和君つていう、今もやつてますけども。で、「篠井さんも女方やりたいんですよ。僕もやりたいんですよ」つて。クラブは歌舞伎研究会つてところでやつてたんですけど、そこ女の子もいるので、女の役なんか回つて来やしらないですよ。お侍とか爺の役とかしか来ないんですよ。でもしょうがないよね。女の子にそれさせるわけにいかないので、僕は女方やりたくて歌舞伎研究会に入ったのに、結局やらす仕舞いで終わつて。「じゃあもうやりたいから作つっちゃえ、劇団」つて作つた劇団が花組芝居。

ですから、なんか全然偉そうでもなんでもなく、あの劇団は私と加納幸和君が女方をやるために作つた劇団。で、私はホント生意氣だったので、あの「ヒロインしかやらない」とか言つちやつて。で、今思うと本当にいい経験させてもらったんですけど、「四谷怪談」のお岩様。今あの Bankawa コクーンでかかっている南北の桜姫。「東文章」の桜姫。えーあとは何やつたかな。何しろ割とね、名作のね、あーさすがに揚巻はやつてないですけど、ヒロインをね、結構やらせてもらった。で、一通りやつたら「じゃあもういいや」と思つてやめたんですけどね。いい経験でした。もちろん、そんな本物の歌舞伎じゃないですよ。二〇〇人くらいしか入らない小劇場でやるわけで、おまけに、我々流につていうんで全編ジャズでミュージカル化した「四谷怪談」とか。全部ドレスとか、なんかもう適當。本當に適當。で、もう自分達で衣裳縫つたり小道具作つたりして、まー本當にめちゃくちゃでしたけど、勢いがあるんですよ。そういう時代つてね。若さと勢いがあるので、それなりに評価も受け、まあ当時、なんか早稲田の演劇のとても偉い先生の郡司正勝先生みたいな人も観にきちゃつて、「おもしろい」とか言つちやつてくれたりして。で、調子にのつてね、こつちもね。やつたりしたそんな良き時代もありましたんです。ですから私は、歌舞伎は好きです

けれど歌舞伎ではないところで女方を、やり続けてきたんです。でも結局需要がないんです。「女方です！女方の俳優です！女の役何でもやります！」ってこうやってるんですけど、そりゃ女優さんがいっぱいいるので、「なんでわざわざお前に」っていうことになりませよね。なので、今ご紹介いただいた『欲望という名の電車』とかに至っては、一度は、そのジェンダー、性を取り違えて上演してはいかん！っていうことになり、切符まで売っていたのに、ダメだ！っていうことになって。上演中止になり、えーそれから九年後には、著作権を持つている人の考え方が変わった、というか時代が変わったんですね。なので、上演できるようになりましたけど。まあ障害こそあって、全然スムーズではなく、未だにですね。えー例えば年に三本「篠井さん、お芝居出ませんか？」っていう依頼が来ますよね。三本とも男の役です。で、五本目にちよつと女の役来るかなーって、いやでもほとんどないね。ですから私がやっているその『欲望という名の電車』も、去年やりました『サド侯爵夫人』も、今年の秋は『サロメ』をやるんですけど、オスカ・ワイルドの。全部自分で企画して、公演してるんですね。だから、常に自分でプレゼンテーションしながら、「女方の篠井でございます！」っていう風に公演していることが多いので、些か疲れてきた(笑) まあ当たり前なん

ですけど。で、しょうがないと思ってるんです、本当に。ですから一生、えーそういう古典芸能とかっていう枠の中にいるわけではない私は、一生自分でプレゼンテーションのように、女の役を自分でつくり、企画し、公演を打って、ずーっとやり続けなければいけない、ともう覚悟決めてるんですね。だから、こういう風に「女方」なんて大仰にタイトルをつけていただくと、もうとても面映ゆい。とても、なんか申し訳ない気になってしまう。で、歌舞伎の女形さんは、「女形よ」ってこう、堂々とね。言えますからね。いいなあってちよつと思うんですね。私は別にそんな、何の後ろ盾もなければ、何のアレもないので。まあしょうがない。こういう人がこの時代にいても、まあ良いかと。で、真面目に、真剣にはやってますから。男一生の仕事として女方をやってるんですね。私の場合。本当に。なので、えー腹くくって頑張っているの、まあ応援していただけないなあとは思うんですけど。

じゃあ今現代女形って言うって誰がいるってちよつと思つた時に、美輪明宏さんとか浮かんじやったわけね。で、あとピーターさんとか浮かんじやった。今この二人くらいかな。あの演劇で女の役で主役張って、お客さんも喜んで。あと大衆芸能はありますよ。大衆演劇。早乙女太一！好きでしょみんな。あと誰だ。たき：何とかこたろう？竜小太

郎さん？綺麗な人。ね。若い人。でも早乙女君は今すごいね。人氣が。で、彼は踊りも、きちつと古典を勉強していらつしやるので、いいと思いますよ。ああいう人が出てこられると困るわあくほんつとに。どんどん浸食されていってしまう。ただでさえ仕事がないのに。すぐもう僕なんかつぶされちゃいますけどね。でもまあああいう人がいる。それから、宝塚みたいなのも。これはまったく逆の性ですけど。あれも延々とあるでしょ。で、日本人はね、性を取り違えるつてことを当たり前だと思つてるんですよ。芸事。舞台の上で。で、あのもうちよつと難しいこと言つとフォークロアつていか民俗学的に言つても、なんか村のお祭り。お祭りとかみんな割と青年団の人がお母さん、奥さんとかの長襦袢着て、女の扮装して踊つたりするんですよ、日本の場合。あれは何故か。まあその母なる、そういうものを表しているのか、いろいろあるんでしょう。でも、所謂こう「異装する」、つていうことに抵抗がない文化なんです。なので、未だに、あの宝塚もあれば、歌舞伎もあれば、つていう国なんです。で、そんな中でいて、あつ「オネエMANS」もいますよね。まあでも皆さんからしたらさあ、あんまり変わりがいいんじゃないかつていう風に、自分は違ふと思つてますよ、全然。だけど、広い芸能一般から言つたら、I K K Oも篠井英介も変わらんの

ではないかと（笑）まあ極端に言えば玉三郎も同じか!?みたいな（笑）でもそれぞれみんな、「私は違うのよ！」つて思つてるんだと思ふんですけど。で、美輪さんとかピーターさんも、一応先輩ですから、会えばね、「あ、先輩つ」みたいな顔してゐるんですけど、あの人達ともやつぱりちよつと違ふと思う、と僕は自分で思つていて。もう何かほんのちよつとしか違わぬのかもしれないんですよ。だけどちよつと違ふと思つていて、彼らは、んーとそれこそ「異装」ね。異なる装い。つていうことがまずあるんですよ。ですから若い頃からピーターさんなんかは、もうほとんど中性的な格好をして歌を歌われたり。「夜とく」とか言つてね、美輪さんももちろんそういう人でした。女装して、石投げられながらも、あの戦後の大変な時ね。髪の毛染めて。それで、銀座を闊歩し、みんなに嫌われながらも。で、あの方の場合はもうレジスタンスでしたね、女装することが多分。もうすごい、世の中に対する抵抗。ものすごい、ある意味で政治的な、思想的な何かがあつたんだと思うので、僕なんかよりは全然、ある意味で骨太なので、今ああやって、まあ観音様のように、美輪教の教祖におなりになつてらつしやるのも、まあ領けなくはない。本当に石投げられたつておつしやつてますしね。でも多分そうでしょうね。六〇年前あんな人が、いくら美しい美少

年だからと言って、なんか女装して化粧して銀座歩いてたらやっぱり大変だったでしょうね。みんなから白い目で見られて。すごい思いをなさったんだろうと思います。で、ピーターさんだったらもっと全然、あのあちらはいいお家柄の方ですし、ゆとりもあって、あと、当時の芸術家とのご縁もあつたりしたので、アングラ的な？その、アバンギャルドな？そういう、ある種芸術性の上に、自分の美しい、美少年の女装、みたいなのがあつたりなんかしたりして。いずれにしてもお二人の場合は、そういう風に、女の扮装をする。女と見間違ふ、みたいなところから発展して、女性役を演じるっていうような。ピーターさんに至っては越路吹雪やってますからね。すごいですね。またお上手なんですけどね。美輪明宏さんは、もう『黒蜥蜴』はあるわ『毛皮のマリー』はあるわ、もう名作目白押し。あの人のためにあるっていう。

去年あの、私が『サド侯爵夫人』を、三島由紀夫のね。もうあの三時間に及ぶ膨大なセリフ。もう何言ってるか半分以上わからないんだけど。まあとにかくお経のように覚えるしかないさっていう。名作ですけど。あれはもうやっとなかないともう覚えられないと思つたんで、五〇歳の時にやるわ！と思つてやつたんですね、企画して。で、東京公演が終わって旅公演に行く、名古屋に行く新幹線に、今日

の僕のあれじゃないですけど、また鞆持つて一人ふらーふらーとこう、ホームを歩いてたんです。新幹線の。そしたらバルコ劇場の、祖父江さんっていうプロデューサーさんが「英介さんー！」って言うから、「あつ；祖父江さんがいる。ということとは；」ってパツと後ろ向いたら、美輪さんもいたのね。担当なんですよ、祖父江君はね。で、その時期ちょうど美輪明宏さんは「アムール」という、例年のコンサート。「愛」っていうね。あーすごいタイトル。何かドキドキしちゃいますね。僕なんかとてもそんなタイトル怖くてつけられない。愛ですよ。それは例年やつてらっしゃる公演でして。その旅公演で、あちらは；僕が大阪行くんで、美輪さんは名古屋行くんだつたかな？で、しようがない。アツ、といたから、わーっと思つて「こんにちは；」って言って、で、車両は違つてたんですけど、「いらっしやい」って言うから（笑）しばらく横に座つて喋つてたんですね。喋つてたつていうかほとんどあちらがお喋りになつてて。「どこ行くのよ」って言うから、「大阪です」って。「お芝居？」って言うから「あ、お芝居です」って。「何やつてんの？」って言うから、ああ来たな！と思つて「あの実は、三島のサドで；」「あらあゝやだあゝ」って。「つまんないー」って言われちゃつて（笑）そうなの、実につまらないと言えは、つまんない。本読んだ方

がいろいろな作品ですからね。だけど、本当に後世に残る、大傑作ではあるの。ただ本当に難しいのは、三島はあいう人なので、あの当時の新劇の女優さんに対して、まるで外国の翻訳物のようにセリフを書いて。シェイクスピアとかのように書いて。で、「これ、お前ら外国の演劇ばかりやってんだけど、これやれるもんならやってみろ！」ってバーンと新劇の女優に叩きつけた台本なんですよ。そういう戯曲。だから、あえて小難しく翻訳調に、あと難解にしてセリフを。でも、三島は歌舞伎の大ファンでもありませんから、やっぱりいい調子が素晴らしいんですね。そこが悔しい。だから、覚えちゃえばお経がピツとこうスイツチ入るみたいに、バーツと出るんですけど、そこまでは大変。それと、やっぱりその義太夫であるとか歌舞伎の調子みたいなものをやっぱりイメージしてつくってらっしゃるところもあるの、ものすごい力がある。セリフをこう、言うことに対して。それで、とにかく素晴らしい本なんです。へなちょこな女優さんでは本当に難しい本なんです。でも、おもしろいとか、エンターテインメント！とか、そういうものではやっぱりない。なので、ほとんど公演されてないじゃないですか。労多くして甲斐なしって僕なんかはつきり言いましたからね。新聞の取材で。だって面白きやみんなやってますって！天下の三島由紀夫なんですか

ら。世界の三島由紀夫の最高戯曲って言われているのをやらないっつーことは、つまらないっつーことなんです。それと、やる方が大変だということなんです。でも僕は、ほら一応女方だし。登場人物女六人。全部男でやったらかっこいいなとずっと思っていたので、全部男六人で、女のこんなロココのね、『ベルサイユのばら』みたいな着てね、鬘もこんな縦ロールみたいなのでね、やってみました。やつと東京公演がとりあえず無事に終わり。まあ一緒にやっていた俳優さんが途中でセリフが飛んだとか出なかつたとかいろいろアクシデントがあったものの、とりあえず終えて。さあ大阪公演、とかっていう時に美輪さんに会っちゃった。で、もう美輪さんのね、一刀両断。「つままない！」ってこう隣で言われたわけです。「あはははは……」ってもう笑うしかありませんよねえ！夜にはやるんですから私。「きたきたきたきた」と思いながら。「そうなんですすよね、なかなか大変なんですすよね」まあ大人ですから。「大変なんですすよ」って。「何やってんの？」って言うから「ルネですよ」当然主役のね、『サド侯爵夫人』の。自分で企画してんですから。ね、主役やんなきゃねえ。で、言ったら「つままない」またつままない。そしたら「昔ね三島さんがね。あたしにやれって言ったのよ」って。ホントなんでしょう。で、三島さんがあたしにルネをやれと仰

つたと宣う。で、「どうしたんですか？なさってないですよね」て言ったら「断ったわよ、あんなつまらないの」って仰って。「やるならサンフォンね」って。サンフォンって、悪徳の代名詞みたいな。まあマルキ・ド・サドの話ですけど、サドはでてこないんですけど、まあサドの化身みたいな女版サドみたいな人がいるんですね。もう悪徳の限りを尽くすエロチックな貴婦人。サンフォン、伯爵夫人。それは面白い。「それならやるわって言ったのよ」って。「じゃあどうなったんですか？」って聞いたら「君がね、ルネをやってくれなければ成立しないから、じゃあこの公演はなしだ」ってこう、三島由紀夫は言ったそうです。十五分くらい話を聞かされ。：はいはい、すごいエール送ってもらった気持ちで思っ。まあなんかわかんないけど頑張れって言ってくれたんだな、という気持ちになって、お別れしたんですけど。まあおもしろいですよね。その時の出で立ちには、そーねえ、こういう鮮やかな、サーモンピンク。あの品のいいピンクでした。新幹線のグリーン車に乗っていらっしやいました。エールを受けたのかエネルギを吸い取られてしまったのか。地味な私としてはよくわかりませんでした。まあ同時代にあの人がいてくださることはものすごい、大変嬉しいことではあります。ああいう人もいないことには、今の私もない、と。そういうわ

けで三輪さんやピーターさんとは私はまたちょっと違うと自分では思っています。

もう少しわかりやすく言うと、歌舞伎の振り付け、私、藤間流の舞踊をやってるんですが、宗家藤間流。藤間流もいろいろある。家元派とか。で、家元は今の松緑君。昔お父さん辰之助さん。あとおじいちゃんの松緑さん。あつちが家元派。私は藤間勘十郎派。で、六代目、六代目の勘十郎って人がいて、その人が戦後の歌舞伎を、実に引っ張った。振り付け家として。六代目歌右衛門六代目勘十郎がいなかったら、戦後の歌舞伎は全然違っていました。本当すごい人だった。で、僕はちょっとその人は終わりの方に一緒に一緒に。で、その人は、歌舞伎俳優ではなく歌舞伎のある意味での演出家であつたり振り付け家であつたのが、自分が舞踊家として立つ時には素踊りしかしなかった。今の尾上流の方達とかも、お家元や息子さんも、素踊りを大事にしていらっしやる。それは、歌舞伎俳優ではない。私達は日本舞踊家であるからっていうことなんです。でも別に舞踊家が衣装つきで藤娘やったり道成寺やったりしても全然いいんですけども、まあ自分の美学というかボリシーがおありになった。で、六世の勘十郎もそうだった。ですから、僕は、女方でも素踊りが好き。で、なぜかと言うと、例えば美輪明宏さんが、また名前出して悪いんです

んです。お客様お一人お一人の感性に。で、今日お腹の調子悪い人もいれば夕べ寝不足の人もいれば早くここから出てご飯食べたい人もいれば、もうそんな人達に責任なんか持てやしないやって思ってるんです最近。ね。皆てんですもんね。昨日恋人と別れた人もいればさあ、今妊娠三ヶ月でちよつと今オエツてなってる人もいればさあ。もうそんな不特定多数の人達にね、そんな同じように感動しろとかね、同じように笑ってくれとかね、同じようにここで泣いてくれなんて、もう無理無理！無理！だから、こちらはベストを尽くしますよ。こちらはベストを尽くすんだけれど、もうおいてけぼりの人はどうぞおいてけぼりで結構、っていうのが割と私のやり方なんです。だから、それはまあそういう風にご批判も受けたりしながら、最近至った境地。

で、もう一つ言うと、その、ないものを見えない人には見えんでもええわいっと思ってる。えらそうに言え。だって、話がボンボン飛んで申し訳ない。えー、ゴッホの「ひまわり」は、まあものすごい名作だと。「モナ・リザ」も素晴らしい。世界の宝だ。だけど、日本人はみんなつるむから、もう我先にゴッホ！って言うのとゴッホだし、モナ・リザー！って言うのとモナ・リザだけど、ゴッホのひまわり見てじゃあ具合悪くなる人も絶対いると思うのね。や

だ、とあれ。こわい！気持ち悪い！モナ・リザ、モナ・リザって言うけど気色悪。なんかぐにゅってしてるの気持ち悪い。いてもいいんですよ。芸術ってそんなもんなんです。感覚だから。感性だから。誰もがなんてことはありえませんが。小説でも音楽でもそうですよ。若い子のあのガシヤガシヤガシヤガシヤね、電車の中でいて、あんなもの聞いたら馬鹿になるからやめなさい！ってこう言いたくなるようなの聞いてるでしょ？でも彼らは楽しいわけですよ。楽しかったり元気もったりするわけで、もうクラシック好きな人もいればジャズ好きな人もいればロック好きな人もいれば、もうそれぞれなんで、芸術っていうのは、その多く、不特定多数の人は素敵だと思ってしまうものももちろんあるにしても、こうでなければいけないなんてことはないんです。と私は思っているんです。なので、私も、別にそのきらびやかに何かその装いをしなくても、お客様の豊かでものすごく素晴らしい想像力のおかげで、女方をやり続けたい。で、それを期待しなければ女方をやっている意味がない。僕が。

ちよつと飛んじゃいますけどわかりますか？たとえば、美少年が扮装して出てって「どう私綺麗でしょ」って言うけど五分見ればわかりますからね、その様子はね。はいはい綺麗ですね、その布はシルクですか、ああそうですか。

で、はいわかりましたですよ。でも、もしも無地のシンブルなドレスを着たり、あるいは紋付袴で振袖があるように踊りを踊ったら、見える人達にとってみれば、どんなその衣装や、その役柄が、どんな膨らんでいくはずなんです。それが素敵だと思ふんですね。それはもうご自分の中に、それぞれの方達がご自分の中に蓄えてきた、豊かな想い。昔ああそうだなあ、うちのお母さんが着ていた、あんな着物なのかしら。あ、そういえばあそこの博物館で見た、あんな感じの柄なのね、とか。あるいは私が昔観た映画、昔見たテレビ、それから小説、絵。そういうものを蓄えてらした皆さんそれぞれの歴史とか心の中の文化みたいなものが、無である私の演じる何かに全部跳ね返ってくるんですね。託されていく。で、それは豊かなことだし、こんなに素敵なことはないと思うわけです。僕にとってみれば。それが一番の、私の今の演劇やっていたりする喜びであったり。いちいち聞きませんよ、どんな風なドレスに見えました？とか。ね！あなたは何を浮かべましたか？とか聞きませんけど、絶対にそういう人達が、ここに例えば二〇〇人いらしてくださいっているとすれば、まあ二人？三人？わかんないんですけど、何人かいてくださるはずだという、それだけを糧にやってる感じ。実際はね、もっといらつしやると思う。で、それはお年召してきて、いろんなものに

触れてきて、特にそういう芸術文化的なものに造詣の深い方にとってみれば、いっぱいのが私の演じる中に浮かんでくる、その方の想像力が。もっとお若い方は、その、自分の中にある引き出しが少ないわけだから、もっと単純にしか見えないかもしれない。けれど、何か別のものを感じてくれるかもしれない、それはもうお好きなように捉えられてくださっているんです。

だから、私がやるうとしている演劇での女方というのは、決して「篠井さん綺麗ね」とか「素敵だった」とか「色っぽいわ」とかって言われたいわけでは本当にないんですね。昔からよく「綺麗だったわ」とか言われたりすると、結構嫌な気持ちになることが多いんですね、ひねくれてますよね。別に、だってある程度綺麗にならなきゃいけないのは、最低限度だと思ってるわけです。美人の役だったとしたら。ねえ。まあ『サド侯爵夫人』のルネっていえばまあ大概美人だろうと世の中の人は想像する。えー、ブランチ・デュボアっていう役も、まあ大概美しかろう、ちょっと年取ったってオールドミスだけど、まあそれなりにいいところのお嬢ちゃんだったんだね、没落しちゃったけれどね、ってだから、そういう最低レベルのことは、もう努力してるわけですね。出てきた時に。私は一応美女ですよ、という思いのもとに出てくるから、「綺麗だったわ」とかって言わ

れても、うーんそれはもう別に当たり前って言ったらいけないけど、まあそれは……っていう気持ちになるんですね。あと、すごくシヨックだったのは、「も〜篠井さんのことしか見えなかった〜」って言われた時。うっそ〜……と思って。三時間何やってたんだろ〜。お芝居やってたんですね。だから、えーと私がブランチ・デュボアっていう役をやっていたら、相手役であるスタンリーとか、妹の役とか妹の旦那とか……その人間関係、コミュニケーションとか、変化していく心？こんな風に始まったのがこんな事件が起こった、こんな心の交流があつて喧嘩した、笑つた、泣いた、だからこうなつたんだ、つてものを戯曲っていうのは書かれてるので、別に篠井英介が美しかったとか、優雅だったとか、女と見間違ふようだったとかつていうことを言われても、もうすつごい大失敗だつたと思つて。これはいかん！僕しか見えないんじゃないことだ、と。一ヶ月間稽古したのは、お芝居を作る稽古をしていたので、僕しか目立たないなんていうことをしていたつもりはない。でも、その方にとつてみれば、褒め言葉。ね。素敵だったわよ、つていうことを言つてくださったんだらうけど、こつちからすれば真に受けちゃつて、も〜大変だと思つて、次の日もう一回朝っぱらから稽古しようかと思つたくらいでしたけど、まあそうもいかないので。なるべくその時と

かはこう客席の方とか向かなかつたね、あんまり。こつちよつとでもこういう風に喋ると、まるでその媚びて、お客さんに対して演技をしているように思われちゃいかん！みたいな。だからずつと後ろ向いて喋つてたかもしれない。ずつとこつちよつと。だから後ろ向いて喋つたりするの大好きです。何故かつていうと、こつちよつと喋つて、誰かここにいる人と喋つてると、想像するでしょ、皆さん。今どんな顔してるんだらうとか。で、今までこんな流れの一時半お芝居観てきて、今ここで、この人はあえて顔を見せずに、この台詞をこんな風にあの人に言つてるといふ、ずーつと積み重ねを、演劇を観てきたんだから、この顔は、どんな顔してるかつていうのは、それぞれ。どんな想いかつていうのは、それぞれの人の中に溢れるように出てくるはずなの。だから見せたくなくなつちゃう、逆に。一番いいセリフ。一番素敵なところを。つまりただのマテリアルでありたい。素材ですね。

でも、そのマテリアルは上等な方がいいんですよ。やつぱり。上等つていうのも古風な言い方ですけど。例えば、うーんこれは違いますけど、まあこれが日本の場合本当不思議なもので、なんかこのものだからわからないようなお茶碗にでもね、国宝になつちやつてね。あの、もちろん由緒謂れはあるんでしょう。信長がどうしたとか足利尊氏が

どうしたとか。だけど茶道の世界では、ええ〜っていうようなものが素晴らしいってされてますよね。で、それはただのお茶碗、だったりする、何でもないのでに想いをこめてるんですね。いろんな人達が。で、ここにちょっと傷がありました、みたいな。で、これがどうも何かに見えますから、なんて言って。見立ての文化ってのも日本にはありますからね。それをなんか松の木に見立てて、これが、まるでこの模様がどっかの砂浜で海の松原です、みたいなことになっちゃってね。松原、とか銘がはいっちゃってね。それでまあ売れば何億です、みたいな。でも、それは見る人達に受取手側に、日本人ってそれだけ豊かな、想像力と感性があるっていう風に僕は信じているんですね。だから、これも誤解かもしれないし偏見かもしれないけど、日本人特有かもしれないよ。誇るべきですよ。外国人の人は見たら見たまましかないかもしれない。だから僕のプランチもやっちゃいかんって言ったのかもしれないけど、日本人は、見えてるものの違うもの、見えてるものからまた違うものを想像する力っていうのかな。絶対それが長く歴史の中であると思います。あの、お能なんて何やってるかわかんないでしょ？僕も見ますよ。見ますけど…はあ〜っと思って。あ、十五分寝たわ、まだ変わってない！さっきとおんなじ！十五分も。すごいですよ、お能は。十五分

こうやったきりだもん。ね。でも、あれが、今に残ってるってことはよ。例えばね、こうやってこうやるとあれ泣いてることになるんですね、演技の様式としては。そういうのはいくつか多分パターンとしてある。歌舞伎の場合もつとリアルですけど。日本舞踊もそういう振りも、こうやったら山を見てるんだとか、こうやってこうやったら風が吹いてるからそれを避けてるんだとか、そういう約束事はある。でも、あの能の約束事というか、演技の形態はもつとわかんない。でも、あれが残ってるということ、いかに日本人はあの何もしない、ちよつと首がこうなった、っていうこれに、ものすごい想像力と想いのたけを込められる民族なんですよ。で、未だに僕は五〇にして恥ずかしいけど、お能の役者の上手い下手はよくわからない。だからみんな同じようなことやってる風にしかあんま見えないもんね、足の運びとかは歴然とわかるので、ああこの人綺麗な足の運びするなあとか、ね。白足袋で橋懸りスーツと出てらっしゃるのって気持ちいいよね、見えて。で、素敵だなあ、この人は素敵だなあと思うけど、一概にスムーズだから素敵とも言えないんですよ。お年召して、七〇過ぎてもういいよ足腰が少し弱ってらっしゃって覚束ない足の運びにこそ、素敵、つて時があつたりするでしょ、日本の芸能って。亡くなった六代目の歌右衛門なんてお御足悪かったからス

ムーズに歩けなかったもんね。だから、道成寺で花道ってこうやって鐘にポーンってやって花道から本舞台のこの道成寺の鐘のところまでずーっと、長いですからね歌舞伎座。もう何間あるんだろう。十三間くらいある間口のうちの八間近くをシャーツとこう行くんだけど、もうずーっとこうやってしんどそうなの。だけど、もう何とも言えない味わいなんです。日本の芸って若さに溢れて力があればいいかって言うとまたそういうもんでもないでしょう。だから、独特なんです。日本のこういう文化って。そういう風なものに根ざして、自分もあるとすれば、見えないもの。目にはつきりわからないもの、形なきものにこそ、ものすごく素敵で豊かなものがあるに違いないと信じていたいし、これからもそういう風にして、女の役をやり続けていき、皆さんの想像力を喚起させるだけの上等な女方で、生涯を終えたいなあと思ったりしているわけですが。

ちよっと難しい話もしましたが、少しおわかりいただけでしょうか。

以後質疑応答（抜粋）

女優さんと共演するの大好きなんです。で、女優さんという違和感なくいなければいけないと思っっているんで

す。例えば美輪明宏さんとか出して本当に恐縮なんですけれども、美輪さんと女優さんが一緒にお芝居するとやっぱりちよっと難しいんですね。何故だっていうとあの方はだいたいいつも同じメイクだったりするので、女優さんは女優さんなりに自分の役柄にふさわしいメイクをなさったりすると、やっぱりちぐはぐになってしまふ。で、僕はなるべく、女優さんと一緒に出た時に違和感がない女方でいたい。今お話したように皆さんの想像力を素直に喚起できる。無になるわけですね。男がやっていることで。そこに、皆さんの投影されるものが、大きいのではないかと思うんですね。虚構だから。嘘だから。そっちが狙いどころなんですけどね。

お話に出ました『瞳』というNHKの朝ドラ。バーのママさんみたいな、だからその女方っていうよりは、ちよっとオカマちゃん入ったキャラクター。ご存じない方のために言いますと、近所のちっちゃい子が、「おじちゃんはおばちゃんなのー!？」と聞くんですね。で、「どうしよう、何て言ったらいいんだろう。人間よー！」って答えるんですね。そしたら、なんかまあ納得したぞっていう、とてもいい役といい台詞を私はいただいて。オカマさんとははっきり言わないんですが、ちよっとオカマさんの人も、ど

んな人達も一生懸命生きてるし、そういう偏見をなくすっていうようなとてもいい名場面、名ゼリフでございました。私もあの台詞を言えたことだけで半年間の苦勞が吹っ飛びました。

例えばテレビとか映画がちよっと僕はしんどいな、と思うのは断片的に撮っていくので、ラストシーンが最初もあるんですね。明日名古屋行って撮影するのも、いっちばん重要なシーンが初っ端なんですね。でも演劇は、最初から最後までまず台本があつて、私達は今こういうお話を結末までわかつた上でやつて、コツコツと一ヶ月くらい毎日稽古していく。で、人の台詞も全部わかつて。で、工夫できる。だけどテレビとかはホントに断片的なんですね。だから演劇では、まさにこの人物を生きたぞ、というような感覚は、正直言つてある時はあるんですね。まるでそっちの方が本場で、今ここでこうやって喋つてるのは、これは何か夢？みたいな時も正直ちよつとあつたりして。なので、これは楽しいのか、辛いのか、大変なのかが微妙なんです。で、アラフィフティとすれば、そこにね、いろいろ惑いの感じがあつて。さて、来世はねえ。少なくともね、俳優じゃない方が楽かなあ。俳優大変です、やつぱり。充実感がなくはないけど、その手応えはなんじやつて言えな

んじゃない、なんです。芸術とか絵とか音楽とかお芝居とか映画とかはとても素晴らしいし、とっても豊かなものであるし、必要なものだと思つてくださるけれど、本当に戦争になつちやつたとか、天変地異が起きて明日食べもの着るものがつていう時は、歌舞音曲なんぞは真つ先に、私達の仕事は真つ先にいらぬんですからね。ただ、人間はその次には音楽が聞きたいし、その次には本も読みたいし美しいものを見たいしっていうのは人間の素晴らしいところなので、芸術って素晴らしいとは思うんだけど、芸術家になるのは大変。芸術を生業に、仕事にするのはそういう意味でいろいろ大変。辛い、とも言える。

「3軒茶屋婦人会」というのは、私と深沢敦くんというちよつと小デブな、あと大谷亮介さんっていう、皆さんは例えば、『相棒』というテレビドラマで、レギュラーで出ている俳優さんなんです。そのおじさん三人が、女の役を必ずやるっていうプロジェクトで、「3軒茶屋婦人会」っていうふざけた名前を深沢くんが考えて、最初に『ヴァニティーズ』っていうアメリカのチアガールのお芝居。二番目はジュネの『女中たち』っていうちよつと難しいお芝居。で、この間は日本人の割と若手の作家さんに書き下ろしてもらつた『ウドンゲ』というどこにでもいる地味な三

人のおばさんの同窓会。五〇歳になったようなおばさん達三人っていうのをおじさん三人で演じたんですね。とても面白いと思うってくださったみたいで。「3軒茶屋婦人会」は、できればやり続けていきたいとは思っております。大谷亮さんがいづれ六〇才になった時に、皆でもう一回チアガールをやるうかと。「還暦記念ヴァニティーズ」、みたいな。どうだ！みたいなことをちよっと考えたりもしているんですけど。『ウドンゲ』に関しては、あれが一つの作品として完結して、中途半端な終わり方の方ようではあります。あれはああいう作品ということなんで、とりあえず終わっております。別の作品で「3軒茶屋婦人会」は、また活動するかもしれませんので、お楽しみに。『ウドンゲ』ちなみにDVD出ましたので（笑）めずらしく私の作品でDVDになっています。

日本テレビで放送中の櫻井翔君の、『ザ・クイズショウ』っていうので、あやしーい、本当に訳のわからない案内人の役です。一〇話にして名前がわかって、スタッフも本当に喜んでましたね。あの、テレビドラマって、結末までわからないで作り始めてるんです。ですから、一〇話が完結で、今日撮りに行くので最後なんですけど、その一〇話ができてきたのが、六日くらい前なんです。そこで、「はあ

私達は三ヶ月間こういう結末を迎えるドラマを撮っていたのだ」とやつとわかるのね。すごいですよ。で、ちょっとその種明かしちゃうけど、案内人さんは櫻井翔さんと、横山くんとかの役のいろんな裏の事情を知っていた役なんですけど、そういう役だということをわからずに始めているので。今招待状あげたみたいに嬉しそうに「どうぞ！」とかやってるんだけど、実はそんなにこにこしてちゃいけない役だったっていうことが、今になってわかって。あーあ、見てる人はなんて駄目な俳優なんだろうって思われるんだろなあって思って、やっっているのがテレビドラマ。連続ものはね。二時間ものとかはちゃんと最後まであるんですよ。本、台本一冊。ちゃんと結末までわかって、撮り始めるんですね。映画みたいに。でも毎週やってるあれは、本当に撮りながら台本作ってるので。昔もありました。あの『君といた未来のために』の、堂本剛くんが主役だったんだけど、「剛くん達を励ます、いい喫茶店のマスターの役です」って言われてたんですけど、視聴率が振るわなかったせいか起爆剤にされて、実は元やくざで、喫茶店の奥から長ドス出してくるっていう。「おい！」とか言って。もうそれはスタッフも大ウケでした。「いや、こんな展開ありえねー！」とか言って。失礼な感じですよ。ものすごいいい人で作ってたんで。これも、駄目な俳優っ

て見た人は思うんだろうな〜って。そんな喫茶店の奥に刀隠してゐるくらいだったら、こう影のある悪い感じも時々出しとけばよかつたって、もうそれ後の祭りですからね。よくそういうことがあるので、面白いのですよね。

僕は一回『欲望という名の電車』の上演が駄目になった時に、女の役を男がやっちゃいけないっていうか、アメリカの著作権者に言われた時に、当時既に、杉村さんはまだご存命でランチ役をやっていたらしゃつたんですが、その時も既に七〇歳くらいだったんですね。で、七〇歳のおばあちゃんが四〇代の役をやっているんだったら、男がやるのも同じだろうと。杉村さんが最初なさっていた、『女の一生』の布引けいなんかも、一〇代から始まりますよね。おさげで。でもああなるともうほとんど女方と一緒にすよね。もうなんだか女じゃないんだもの。それって、まだ僕がやった方がよかろう！みたいな。だから、ちよつとそこは僕の方がついていう気になる時もある、その、ああいうの、もう古典芸能ですからね。杉村さんのランチが、やっぱ僕すつごい好きだったんですよ。それで、杉村さんのランチにあこがれていて、杉村春子のランチをやりたかったって感じ。かと言って杉村春子ではないし、まして男だし。でも、お手本は全部杉村春子なの。極端に言う台

詞のある部分の言い回しも。でも、それはなんで僕がそうなるかっていうと、僕は古典芸能やってたからなんですよ。古典って真似なんですよ。あの、日本の芸は、「道」とつく道は、茶道でも華道でもそうですけど全部真似から、ですよ。本来マニユアルなんてないんです。今でこそ、茶道の本とか、華道の何々ってテキストブックありますけど、昔の日本のお稽古事は、全部「理屈なんかいいから真似なさい」でしょ？ですから僕もそういう世代で日本舞踊始めて、もう何か言われようが「はい、じゃあ次の足だして。はい、お手手こうやって」なんていう時からやっていますから、僕は杉村春子のランチをまさにそのまんま、体現しようと思つてやっていたんです、最初。でも観る人は、「あれは杉村春子の真似だ」とは誰も思わないんです。何故なら、僕は僕だから。男だから。で、時代が違う。共演者が違う。衣装も違う。セットも音楽も違う。もう全部違う。そうすると、自分はその時の杉村さんのこの台詞回し素敵だったんだけどな〜と思つて真似してやっても、まるで違うように見えてくるんですね。で、僕は、芸とかがついているのはそういう風でいいと思つてゐるんです。真似をしつつ、自分のものにしていくっていうんですか。で、僕がやるって言ったそのシンプルで透明で、その想像力を掻きたてるっていうことは、それにプラス加味していまして、女

のドレスっぽいものとかスカートっぽいものとかをなるべく排除していつて、もうまさに中性的なおじさんだかおばさんだか、なんだか外国の人なんだか日本人なんだかよくわからないぞ、というような風情で行つて、十五分待つてね。十五分観ててくれればわかる人には、心豊かな感性のある人には、わかるから。あるいは、お芝居に入り込んでくれるだけの頑張りでこっちはやりますからつていう。で、わからない人はずーつと何かわからなかつたつていう人もいてオツケーつていう、やり方なんです。正直言つて、もうちょっと若い頃は、本当にジーパンとTシャツでやりたいぐらいだつたんです。なぜなら、自分が若くてそれなりに若さという美しさがあつたから。で、アラフィフティはちよつともう装わなきゃいけなくなつてきてるんです。悲しいかな。ちよつとつけていかないと、ちよつと駄目になつてきてる。今はちよつと装つて、ちよつと女っぽくしていかないと、と思つてます。実に、この先は。

普段することないんですよ。本当に。もうそれが悩みの種。趣味ないんです。今年に入って今六月でしょ。既に、四〇本近いかな、お芝居観てるんですね。することないからなんです。明日休みかあ〜どこ芝居観に行こうかなつ

て思つちゃうんですよ。でもそのうちね、演劇観るの疲れるんです。やつぱりナマだから。映画観る方がうんと楽なんです。どんなにつまんなろうがやつぱり生身の人がやつてるから、こっちも一生懸命何とか、はーつと思ひながら観るわけですよ。そうするとやつぱり演劇でも、ナマの人のナマのものを観るつていうのは、それなりに素敵だけど、エネルギーも使う。すると、あー明日芝居観るのしんどいなあつて思うんですけど、その日になつてみるとやることないので、行くかあ〜つて思つて、お友達に電話して「チケット頼むわ〜」つて。「一枚でしょ？」つて言われるから「はいはい一枚です！」つて(笑)「一人ですどうせ！」みたいな。そんなんで、ただ演劇に明け暮れている日々でございます。

取捨選択をするんですよ。えー僕にもあなたにも、私にも皆さんにも、いろんな才能、いろんな力、いろんな美点、いいところ、とつてもある。とても社交的で、いろんな人とも本当に楽しくお付き合いできるし、私自身も人が好きだ、じゃあこういうお仕事が向いてるんじゃないか。あるいはちよつと内向的で、でも何かとても几帳面であるとかつて、いろんな素晴らしい特性があつて、お仕事も選ばうと思えば日本なんて何だかんだ言つてもまだまだ豊かだし平和だ

し、皆さんがどんなお仕事しようが、どこへ行こうが、何を喋ろうが自由な、こんな素敵な今の時代でしょ。だから、何かやろうと思えばやれることは山のように本来ある。で、僕の場合は、えーとこれとこれとこれはできるけれど、一番しんどいものに直面した時に、どれだと頑張れるかって思ったの。で、演劇で食べられなかった、生活できなかつた時にはアルバイトもしていて、飲み屋さんとかで店長さんみたいなことやったり、エレベーターボーイとかやったりしていて。割と真面目に一生懸命働くので、「お前社員になれ」とか言われちゃう時あったりして。で、毎月きちっとお金が入ってくるってことはこんなに人間にとつて心安らかな素晴らしいことなんだと思ったりもしたの。んーこちの方が豊かでいいなあ、親も安心するしなあ。お勤めしちゃおうかなあと思ったりもした。だけど、そこで、例えば上司とうまくいかないとか、何かいろんな出来事が起きる、揉め事とか問題が起きた時に、踏ん張れるかな、と思つたら、演劇の時の方が踏ん張れると思つた。なんかこう、演劇の時には、汚い言い方でですけど「なにくそ！」って思えるっていうの？「よし！」ってこう思える。それは多分、自分がその仕事に向いてるし、好きだからだと思つてですね。なんかまあ割といけるかなこの仕事で、と思つても、何か嫌なことがあつたらふにゃふにゃふにゃふにゃ

なる時もあるじゃない。で、その時にどう頑張れるかっていう仕事を選んだら、これだったんですよ。だから、一番演劇に関してだけは根性がある。あとのことは全然駄目。もうへなへな。もうちょっとでも嫌なことあつたら、すぐ「はい、失礼しまーす！」っていう感じ。でも演劇だと、ちょっとなつていう気持ちは今もあるもの。本当に。そこは譲れない、とかね。それはお前間違つてる！とか思つちゃう。まあ間違つてるってことは芸術にないんだけど。でも何か、「ん、君と僕とは違うな」っていうことはホントにあるし。僕も頑張る、こうやつて頑張るんだっていうのは今でもあるので、そこがポイントでしたね。だから、それがモチベーション。だからちよつと言うと負のイメージあるかもしれませんが、一番自分が辛い時にこそ頑張れるっていうのが向いていると思つてまず間違いない？で、またそれも変わるの、意固地は駄目ですよ。決めたたらどんなに辛くても頑張るっていうのは駄目。変わるから。僕来年もう芝居なんかしてないかもしれない。ホントに。田舎で八百屋してるかもしれない。でもそれは多分、僕が今一番八百屋さんを、それも家族と一緒に田舎でね、実家で両親と八百屋さんすることが一番頑張れると思つた、へこたれないで頑張れると思つたら、そうしてると思ってますよ。それでいいと思うんです。変わることはちつとも恥ずかし

いことでもないし、変わるから人間って素敵だし豊かだから、恐れないで、意固地にならず、本質に正直に。カッコつけないで、すごい正直にいる。自分で自分に問うてる？もしもし、あなた？って。一番嬉しいのって何？とか、一番辛いことって何？とか、好きな人は誰？とかって常にちゃんと正直に問うてことは大事かな。

ひとつつちよつと、宣伝をさせてもらってもいいですか？間違つてなければ今月二一日に、自分の卒業した小学校、母校へ行って、『課外授業、ようこそ先輩』ってね。NHKの番組で自分の行った小学校の六年生に、お芝居させるぞっていう番組があつて、とても面白かつたんです。それでテーマは、演劇についてでもあれなんです、もちろん最後はお芝居させたいんですけど。させたいっていうかしてもらったんですけど、見えない、今お話した、目に見えるものだけを信じないで、見えないものを探る心があることが人間の特性ですからね。あなたにも心がある、私にも心があつて、それはものすごく廣大無辺な想像力という気持ちがお互いにあることの前提のうえに暮らしていけるのが人間だけですからね。あなたに心があつて、その心の中でどんな大きなことを考え、素晴らしいことを考えているか、あなたもわかるはずだし私もあるはずだっていう前提がある

のは人間だけなんですよ。で、そのもつともすごいのが芸術。そういう目に見えないものをも信じてね、目に見えないものも素敵よね、衣食住に関係がないけれど、大事よねっていうことを伝えたくてやった授業だったんですね。なのでどのくらい面白いか、見てみてください。で、逸話としては最後に三〇人くらいの生徒さん一人一人にインタビューしたんですって。ディレクターさんが。そうしたら、「はい、篠井先生は衣食住よりも演劇が大事だとか言っていたみたいですけど、やっぱり私は衣食住の方が大事だと思えます」って言ったらいいんで。なし崩しになっているんです（笑）。皆さんもお元気でいらしてください。今日は本当にありがとうございます。